

新アメリカ大統領就任演説：キーワードとしての「旅」

増 永 俊 一

現在、世界の情勢は、アメリカのサブプライム問題に端を発した未曾有の経済的混乱の渦中にある。そのような中で、今年1月20日にアメリカの新大統領としてバラク・オバマが就任したことは、歴史的事件といって良い。若く、有能で、且つ危機的状況の中でアメリカ国民に熱狂的に迎えられたという点では、かつてのジョン・F・ケネディをも彷彿とさせる。ケネディの場合、その宗教はカソリックでアメリカ史上の初の非WASP（ホワイト・アングロサクソン・プロテスタン）の大統領であったが、オバマ氏はついに人種の壁をも乗り越え、アメリカ史上初の黒人大統領となったのである。多民族国家アメリカの国民は今、その再生の希望を彼に託したのだ。

さて、およそアメリカの大統領就任演説は、それぞれの節目を意識して必ずと言っていいほど国家の出自に言及し、その歴史を振り返る。オバマ氏の就任演説は、現在のアメリカが多民族国家であることを意識してか、アングロサクソン・プロテスタンに限定されてしまうピューリタン植民地時代に遡及することを慎重に避けているが、一方で「旅（journey）」という言葉が就任演説の要所要所にちりばめられていることは印象的だ。17世紀植民地時代のピューリタンにとって、新大陸への渡航はまさに命がけの「旅」であったが、同時にこの言葉は、自らの体験を約束の地を求めて40年に涉って荒野を彷徨した旧約聖書の時代のユダヤの民の苦難と重ね合わせ、且つ人生を地上から天国に至る「旅」と捉える宗教的な感性をも包含する。さらに、植民地時代以降も地域、人種を拡大しながら大量の移民が陸続と新大陸へと渡り、それもまた「旅」であったはずだ。

アメリカは、もともとこの地に住んでいたネイティブ・アメリカン以外は、その意志に反して奴隸として強制的に移住させられた人々をも含めて、その大半が「移民」とその子孫によって構成されている国家である。「旅」は、このような国家の構成員の琴線に触れる言葉（辛い「旅」でもある）であり、同時に精神的な、あるいは宗教的な意味合いをもそこに込める言葉なのである。オバマ大統領の下、アメリカは果たしてどのような旅路を今後辿るのであろうか。

（経済学部教授）